横浜YMCA　みつかる。つながる。よくなっていく。　No.501 2020

YMCA News 1

2020年1月1日発行
（毎月1日・1回発行）
1988年1月27日第3種郵便物認可
定価50円
発行／公益財団法人横浜YMCA
広報センター
〒231-8458
横浜市中区常盤町1-7
Tel 045-662-3721
横浜青年

2020年、東京オリンピック・パラリンピックの年を迎え、ますます社会や世界はめまぐるしい変化を遂げていきます。そのような中で、日本のYMCAでは、『互いを認め合い、高め合う「ポジティブネット」のある豊かな社会を創る。』ことを目指して歩みを進めています。多種多様な人の交流や社会の変化が起こる中で、心の奥底からの言葉やメッセージを通して、多くの人の心を癒し、気づけている片柳弘史先生と、いのち、自然の大切さ、平和を創ることなどについて田口努総主事と語り合っていただきました。

新春特別対談

「愛」あふれるこころで共に生きる

ポジティブネットのある豊かな社会を創る

片柳　弘史 神父

横浜YMCA総主事
田口　努

田口　横浜YMCAは、今年創立136周年を迎えます。私たちの置かれている社会状況は、急速な少子高齢化に加え、いじめや虐待、自死、不登校、貧困、格差社会と課題は深刻化しています。そのような中において、親子関係をはじめとするあらゆる人間関係の希薄化も課題の一つに挙げられています。

本日は、『こころの深呼吸』や『ぬくもりの記憶』（いずれも教文館）などのメッセージで多くの人の心を癒し続け、また、マザー・テレサに会うために、インド・カルカッタ（現コルカタ）に行き、ボランティア活動を行った片柳弘史先生のご経験から、私たちが日々の恵みに感謝して、それぞれのいのちを輝かし、ポジティブに生きることについて考えていきたいと思います。

まず、片柳先生の人生を変えられたというマザー・テレサとの出会いについてきっかけなどを聞かせていただけますか。

片柳　マザー・テレサ（以下マザー）を知ったのは、10歳の時です。マザーが来日した時の特集をテレビで見たのが最初です。ヨーロッパ人なのにインドの人たちのことを他人事と思わず、出かけて行って懸命に奉仕する姿に心を揺さぶられました。わたしたちは普通、気の毒な人を見ても「可哀そうだけれど、何もしてあげられない」と思って諦めてしまいがちです。ですが、マザーは「苦しんでいる人を放っておけない」という気持ちにどこまでも忠実でした。「わたしもこんな人になりたい」、マザーを見て、わたしはそう思ったのです。

時が経ち、大学生の時にいろいろ悩んで洗礼を受けました。ただ、勉強会中心だったので、すぐ壁に突き当たってしまいました。「神様はすべての人を愛している」ということを頭では理解できたのですが、「わたしは神さまから愛されている」という実感がまったくわいてこなかったのです。だから、洗礼を受けても、喜びと力にあふれて生まれ変わるということにはなりませんでした。

田口　確かに神様から愛されているという実感や体感する感覚は、なかなかないと思いますが、それを突き詰めて考える人は少ないかもしれません。

片柳　「どうしたら神の愛を実感できるのだろう」と考えているうちに、わたしはふと、昔テレビで見たマザー・テレサのことを思い出しました。「あの人こそ、20世紀でもっとも神の愛を生きた人だった。あの人のことを学べば、何か手掛かりがつかめるかもしれない」と思ったのです。わたしは本屋に行って伝記を数冊買い、読み始めました。読んでいるうちに、日本にもマザーの修道院があることが分かったので、わたしは東京の修道院に電話し、ボランティアをさせてもらうことにしました。

その電話の最後に、「一つだけ質問があるのですが」とわたしはシスターに尋ねました。それは、マザーがいつ死んだのかということでした。伝記を何冊読んでも、どの本にも死んだ年が書いていなかったのです。「マザーは、いつ亡くなったんですか」とわたしが尋ねると、シスターが電話の向こうで大笑いしました。「だって、マザーはまだ生きていますから」というのです。ヘレンケラーやキュリー夫人、エジソンと並んで伝記に入っている人が、生きているはずなどないと思っていたわたしは、びっくりすると同時に「やった、これはチャンスだ」と思いました。「生きているなら会うことができる。会いに行くしかない」、たとぞ恵かたポ

16 平和と公正をすべての人に

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

ホドス

自分専用のパソコンを持ち、ワープロを使えるようになって最初にした仕事は予定表を作ることであった。記載した行事や仕事が終わると、その結果と感想を追記して別フアイルにして保存した。これは必然的に日記ファイルとなった▼子どものころ、母親に勧められ日記を書き始めたら、食べた品物の話ばかりで「食べ日記」と笑われた思い出もあり、書く日記は長続きしなかった。しかし、この電子日記は30年以上続いている▼電子日記には次のような利点がある。手書きの日記と違い場所を取らない。探す手間なく、読み取りも瞬時。遡及調査が容易で、複数年度を容易に調査できる。複製も容易である。紛失もまずない。エンディングノートに書いておけば死後一瞬にして消去も可能である。飲み過ぎて日記を書かずに寝てしまっても書くべき事項は、既に予定表ファイルにあることが多い▼「正月から日記を」と考えている方には電子日記を勧める。日記帳を買う費用も、やめたとき「三日坊主」と笑われる心配もない。文学的日記を書く気概を持っている方は別だが▼筆者の電子日記の字数がこの数年減少気味である。現役を退き仕事に関する記載が無くなった。家庭に要介護の老人ができ、そのため外出が制限され、必然的に社会的活動の記載も減ったためである。「在宅」「〇〇の会合は欠席」だけで済んでしまう日が増えてきた。悲しいことだが、老齢とはこういうことか。

（美）

わたしはすぐにカルカッタ行きの準備を始めました。マザーに会えば、生きている神の愛をこの目で見、耳で聞くことができるに違いないと思ったのです。

田口　20歳代の青年時代によく決心して行きましたね。

片柳　とにかく、向こうに行って、マザーのそばにいれば、道が見つかるだろうという気持ちで行きました。

　カルカッタの空港から車で40分ほど行った街の中心部に、マザーの住む修道院「マザー・ハウス」があります。リュックを背負ってそこまでたどり着き、ドアのベルを鳴らすと、中からシスターが出てきました。事情を話すとシスターは気の毒に思ったのか、わたしを中に入れてくれました。2階の事務所の前まで案内してくれたのです。シスターは、入り口の長椅子を指さし、「ちょっとここで待っていてください」と中に入って行きました。

　しばらくして、中から別のシスターが出てきました。最初のシスターと違って、背中が曲がり、顔はしわくちゃ、色も白かったのです。「あれ違う人が出てきたな。でも待てよ…」、そのときわたしはとんでもないことに気づきました。目の前にいるその人こそ、マザー・テレサ本人だったのです。マザーは、突然訪ねたわたしを、満面の笑顔で迎え入れてくれました。

田口　マザーが自ら歓迎して迎えてくれたのですね。日本からの長旅の疲れ、マザーへの思いを受け止めてもらったことを実感できる時でしたね。ボランティアはどのくらいの期間で、どのようなことをされたのでしょうか。

片柳　「死を待つ人の家」と呼ばれる、病院からも見放され、回復の見込みが立たない貧しい人たちの世話をするためにマザーが始めた施設で働いていました。マザーは、そんな人たちを、道端に放っておくことができなかったのです。中には、運ばれてくるなり、「離せ。どうせ俺なんかどうなってもいいんだ」と叫び、シスターの手を払いのけようとする人もいました。ですが、そんな人たちでも、シスターが献身的に傷口の手当てをし、包帯を変えているうちに、だんだん態度が変わってゆくのです。最後には、「ありがとう」と言って死んでゆく人さえいました。これまで動物のように扱われ、動物のように生きてきた人が、人間らしく扱われることで、人間の心を取り戻していくということだったのかもしれません。マザーは、すべての人が、せめて最後くらい十分に愛されて、人間らしく死んでいってほしいと願っていました。

田口　1年間続けていくことは大変だったのではないでしょうか。最後だけでも人間らしい愛に触れて、人間らしく死を迎えていくための寄り添い、看取りに向き合う尊いボランティアをされたのですね。

片柳　マザーの流儀は、貧しい人たちと同じ生活をしながら、貧しい人に仕えるということです。私たちはボランティアでしたから、そこまではありませんが、シスターたちは、貧しい人と同じように扇風機やエアコンを使わない生活を送っています。カルカッタの暑い時期に扇風機を使わないで寝たら、30分で目が覚めると思います。暑くて、うなされてしまうのです。

　彼女たちは、扇風機さえ買えない貧しい人たちのところに出かけてゆきます。その人たちから、「昨晩は暑かったですね」と言われたとき、もし自分たちだけが扇風機を使っていたら、会話がうまく進まなくなるでしょう。そんなことになれば、彼らと「同じ言葉が話せなくなる」とマザーは言っていました。

　同じ理由で、「死を待つ家」では、どんなに洗濯物が多くても洗濯機を使いません。毛布なら足で踏んで、手で絞り、たらいに入れて頭の上に載せて運び、屋根の上で乾かしています。

田口　まさに寄り添いの実践ですね。

片柳　同じ言葉、同じ目線で話す。徹底した寄り添いということですね。上から目線ではぜったいに神の愛は伝えられないというのが、彼女たちの考え方です。上から与えてくれる人に対して、貧しい人たちは必ずしも心を開きません。この人たちは私のことを分かってくれると思ったとき、はじめて心を開いてくれるのです。イエスの言葉が人びとに伝わったのも、同じ理由からだったでしょう。家を持たず、着替えも持たず、貧しい人たちとまったく同じ生活をしていたからこそ、貧しい人たちと同じ言葉で話し、貧しい人たちに福音を伝えられたのだと思います。

1971年埼玉県上尾市生まれ。1994年 慶 応義塾大学法学部卒業。1994年-95年インドのカルカッタ（現コルカタ）にてボランティア活動。マザー・テレサから神父になるよう勧められる。1998年イエズス会入会。2008年上智大学大学院神学研究科修了。現在は山口県宇部市で教会の神父、幼稚園の講師や刑務所の教誨師として働く。著書に『世界で一番たいせつなあなたへ―マザー・テレサからの贈り物』（PHP研究所）、『こころの深呼吸 一気づきと癒しの言葉366』『ぬくもりの記憶』」（どちらも教文館）など著書多数。

16 平和と公正をすべての人に

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です

「愛」あふれるこころで共に生きる

ポジティブネットのある豊かな社会を創る

マザー・テレサに導かれ

▲人生の道が示されると確信したマザーテレサとの最初の出会い（1994年 インド・カルカッタにて）

田口　マザーの施設でのボランティア活動で一番の学びはどんなことでしょうか。

片柳　マザーは、ボランティアの私たちに「貧しい人たちの中にイエスを見なさい」と繰り返し言っていました。どんなに傷つき、弱りはてたとしても、その人の中に輝き続ける尊い命。その中にイエスがおられるということでしょう。そのことに気づきさえすれば、「奉仕しなければ」などと思わなくても、その人のために何かせずにいられなくなります。それが、すべての出発点なのです。

　神父になろうと思ったのも、マザーの言葉がきっかけです。あるときマザーは、わたしの腕をしっかりつかんで、揺さぶるようにしながら、「あなたはいつまで迷っているのですか」と言いました。日本から来てすぐのころに、人生に迷っているという話をしたのを覚えていてくれたのでしょう。次にマザーは、まったく思いがけないことを言いました。「いますぐ決心しなさい。あなたは、神父になるのです」というのです。神父というのは、簡単な仕事に見えるかもしれませんが、清貧・貞潔・従順の三誓願を守って、財産を持たず、結婚せず、修道院の長上の指示のままに生きる道で、なかなか大変なのです。

　「わたしなんかが、絶対神父になれるはずはない」と思っていたのですが、マザーのもとで働くうちに、苦しんでいる人たちのもとに神さまの愛を運ぶことほど素晴らしいことはないのではないかと思うようになりました。誰かを幸せにすることの中にこそ、自分の本当の幸せがあるのではないかと思えるようになっていったのです。

　最終的な決断は、祈りの中で生まれてきました。聖イグナチオが考案した『霊操』と呼ばれる祈りのプログラムに参加し、ひたすら聖書の言葉、自分自身の心の奥深くから響く言葉に耳を傾け続けたのです。その結果、最後の最後に聞こえてきたのが、「あなたは、この道を行きなさい」という声だったのです。その声が聞こえたとき、わたしはイエズス会入会を決意しました。

田口　決心までには、さまざまな葛藤があったことと感じます。聖書の言葉に聞き自分の心と対話することは大切ですね。昨年秋の台風による水害支援活動として長野県や福島県に青年たちをボランティアとして派遣しました。被災している他者のために自分たちの時間と労力を差し出しましたが、喜びと気づきという恵みをたくさんいただきました。他者の喜びが自分の喜びとなる体験は貴重です。

片柳　世界中の若者が、「自分は愛されている。自分の人生には確かに意味がある」と思える社会になればいいと思います。ボランティア活動は、そのために役立つでしょう。

田口　そうですね。全国のYMCAでは「互いを認め合い、高め合うポジティブネットのある豊かな社会を創る。」というビジョンを掲げています。ネガティブな気持ちがポジティブに変えられ、心に栄養を与えてくださるメッセージが『こころの深呼吸』にたくさん詰まっていると思います。これらのメッセージを体現できる働きをYMCAでさらに進めたいと思います。

片柳　昨年の11月に来日したローマ教皇フランシスコは、『福音の喜び』という文書の中で、貧しい人たちとの出会いの中でこそわたしたちの信仰は生き生きと、豊かなものにされてゆくと語っています。貧しい人たちと出会い、その人たちの苦しみをしっかり受け止め、その人たちのために祈るときにこそ、聖霊が働くということでしょう。貧しい人たちとの出会いの中でこそ、わたしたちは神と出会い、これまで知らなかった神の偉大さに触れ、喜びで満たされる

のです。

たとえば、拙著『こころの深呼吸』（教文館）の中に、『亡くなった家族に自分がしたことを悔やみ、自分を責め続ける必要はありません。その方は天国ですべての真実を知り、そうせざるを得なかったあなたの苦しさも知っておられます。幸せな姿を見せて喜んでもらうのが、何よりの償いです』という言葉があります。これは、教誨師として働く中で、神様から与えられた言葉です。あるとき、受刑者の方がわたしに、「自分は子どもを置き去りにして死なせてしまった。子どもはわたしを怨んでいるに違いない。わたしには幸せになる資格がない」と訴えました。なんと答えていいか、わたしは本当に困って神様に祈りました。

そのとき、ふと思いついたのが、「天国にいる子どもが、この親を怨んでいるはずがない」ということでした。このお母さんも、子どものころから大変苦しい目に遭ってきた方です。天国の子どもは、きっとお母さんの苦しさをすべて理解し、ゆるしてくれているに違いない。あなたが自分を責め、不幸になれば、天国の子どもは悲しむ。幸せになることこそが、子どもへの罪滅ぼしになるはずだ、とわたしはその方に話しました。これは、それまで一度も考えたことがないことで、その方に救いの手を差し伸べるために、神様がわたしにひらめきを与えてくださったのだとわたしは思っています。

この言葉を短くまとめたのが、『こころの深呼吸』に収めた言葉です。最初、SNSで投稿したとき、とても大きな反響があって驚きました。受刑者の方のような極端なケースではなくても、亡くなった家族や友人に負い目を感じている方は意外と多いのかもしれません。

▲子どもたちのいのちがいきいきと輝く愛あふれる社会を目指して共に歩む

YMCAとの出会い・つながり

▲対談を終えて著書を前に片柳弘史神父と田口努横浜YMCA総主事（羽田エクセルホテル東急にて）

【書籍紹介】（左上から時計まわり）

1.『The Life ほんとうの自分になるために　マザー・テレサに導かれて』
2.『The Love 世界で一番たいせつなあなたへ　マザー・テレサからの贈り物』
3.『祈りへの旅立ち　マザー・テレサに導かれて』
4.『祈るように生きる　マザー・テレサと共に』
5.『ぬくもりの記憶』
6.『こころの深呼吸　気づきと癒しの言葉366』
7.『始まりのことば　聖書と共に歩む日々366』　他多数

1・2　文　片柳弘史　絵　RIE（PHP研究所）
3 片柳弘史 著 4 片柳弘史 s.j. 著　石田美菜子 写真　（ドン・ボスコ社）
5・6・7　片柳弘史 著（教文館）

田口　先生は熊本YMCAの阿蘇キャンプ場で、熊本地震や九州北部豪雨で被災した子どもたちと東日本大震災で熊本県に避難している子どもたちのためのキャンプに参加されていますね。

片柳　熊本YMCAの「あそぼうキャンプ」ですね。毎年さまざまなプログラムが企画されますが、わたしが一番気に入っているのは牧場でのホースセラピーです。馬の背にまたがって、広大な牧場を散策するだけのことですが、このセラピーの癒しの効果は絶大です。馬の背中のぬくもりを通して、子どもたちは命のぬくもりを実感します。そのぬくもりは、大自然のぬくもりでもあります。大自然のぬくもり、わたしたちを包み込む大きな命のぬくもりに身を委ね、自然と一体になる中で、心が一番奥深い所から癒されてゆく。そんな感じがします。

熊本地震の支援活動をすることになったのは、震災発生の2カ月ほど前に、職員研修の講師をさせていただいたことがきっかけでした。震災発生直後に事務局に電話をすると、大変なことになっていて、少しでも支援が必要とのことでしたので、大急ぎで水や食料を集めて駆け付けました。到着したとき、ちょうど第一回の対策本部会議が始まるところだったので、同席させていただき、開会祈祷をさせていただきました。その辺りからの関わりです。

田口　熊本地震の際には横浜YMCAからも延べ4百人のスタッフを送り続け、阿蘇キャンプ場近くの保育園に保育士も派遣しました。先生とYMCAとのつながりのきっかけは、元日本YMCA同盟総主事の塩月賢太郎さんであったと伺いましたが、どのようなきっかけだったのでしょうか。

片柳　私たちの修道院の受付の女性が、塩月賢太郎先生を紹介してくださいました。塩月先生の家に何回か招かれ家族ぐるみでのお付き合いをさせていただきました。

神父になるための養成の一環として、わたしが福岡で教職についたときには、塩月先生が福岡、長崎、熊本のYMCAを紹介してくださり、各地でマザー・テレサ写真展を開催することができました。最近では神父になって最初の任地、神戸でも写真展や市民クリスマスなどでYMCAの皆さんにお世話になりました。

田口　支援活動は今後も続けられていかれますか。

片柳　益城町の仮設住宅は、来春から木山仮設団地に統合されるそうです。木山の人たちは8割くらいの人が、3月に災害復興住宅などに移動します。その分の空いたところに、閉鎖される他の仮設住宅にいる人たちが入ることになるようです。クリスマスには、信徒の皆さんや幼稚園の先生たちと一緒に仮設住宅を訪ね、ハンドベルや人形劇などを中心としたクリスマス会をしました。戸別訪問でのプレゼント配りもしました。この段階で手を放すわけにはいきません。これからも支援活動は続けていきます。仮設に住む人たちとつながっているほうが、自分たちにとってもいいということは、みんなが感じていると思います。

田口　震災や災害の被災地では、日常からの社会の課題が現実として見えてきますね。

大切な存在に気づく

田口　横浜YMCAのプログラムに参加する多くの子どもたちの保護者に子育てのアドバイスをお願いできますか。

片柳　幼稚園の保護者の皆さんにいつもお話しするのは、「すべての人がかけがえのない命。神さまの子ども」というメッセージを子どもに伝えたいなら、まず自分自身がそのことを実感している必要があるということです。お母さんがいつも不平不満や人の悪口ばかり言ってつまらなそうな顔をしていたら、子どもたちは生きることがそれほど素晴らしいとは思えないでしょう。お母さんが自分自身の人生に満足し、喜びにあふれた笑顔でいれば、子どもたちは自然に生きることの素晴らしさに気づくはずです。

田口　本当にそうですね。

話は変わりますが、11月に来日されたローマ・カトリック教会フランシスコ教皇の広島・長崎へのメッセージは、あらためて広島・長崎を考えるいい機会であったと感じました。

片柳　フランシスコ教皇は、「教会は野戦病院であれ」と言われています。かつて「開かれた教会」という言葉がはやりましたが、「扉は開かれています。誰でも来てください」と言って待っているだけでは不十分だと教皇は言います。扉を開いたらそこから外に出て行けというのです。つねに最前線に出て、傷ついた人たちの真ん中にいること。健康診断や栄養指導をする病院ではなく、傷ついた人に寄り添い、その傷を癒す病院のようであれということです。

田口　野戦病院ですか。教会が来る人を待つのではなく、むしろ弱っている人、必要な人のところに教会側が寄り添っていく、近づいていくということが求められているということですね。イエスの生き方に基づいてあるYMCAも同じことが言えますね。

片柳　教皇は『ラウダート・シ』という文書を通して、地球環境についても発言しておられます。かつて人間は、巨木の森を見たとき、その厳かな佇まいに心打たれ、森に宿る神を敬う感覚を持っていた。ところが最近の人間は、巨木の森を見ても「いい材木があった。さっそく伐採しよう」としか思わなくなった。そこから無際限な自然破壊が始まったと教皇は考えています。どれだけ欲望を満たしても、それで心が満たされることはありませんから、自然破壊は際限なく続くことになります。この悪循環を止めるには、自然の中に神を見る感覚を取り戻す以外にないということです。

これは、人間についても言えることです。例えば、高齢者を見たときに、その人生の重みに感動するか、それとも「もうあまり役に立たない人」と見るかということです。

田口　日本のYMCAでは、キャンプがはじまってから、今年で100年を迎えます。

キャンプをはじめとした活動を通して、自然と触れ合い、人との関わりの中で、自然のぬくもりや神秘に感動し、自然を畏敬する気持ちを持てるような体験の積み重ねを通して、地球環境をより良くし、平和につながる活動を、YMCAは提供し続けていきたいと思います。

本日は大変示唆に富んだお話をありがとうございました。

（文責　編集部）

YMCA NETWORK NEWS

横浜 各地で市民とクリスマス祝う

イエス・キリストの降誕を多くの市民と祝おうと、県内のYMCAでは12月に地域の教会と協力して、藤沢や鎌倉、大和、戸塚区、泉区などでYMCAが事務局として市民クリスマスなどを開催した。

このうち、12月7日にカンバーランド長老キリスト教会高座教会において、大和市内にあるキリスト教会と大和YMCAの協働により「第22回やまと市民ファミリークリスマス」が行われた。川浦弥生牧師（日本キリスト教団つきみ野教会）からのメッセージ、外国人グループを含む近隣団体による讃美、交流会が行われた。

同日に、横須賀市内の各教会や学校などによる横須賀ファミリークリスマス実行委員会が主催し「横須賀ファミリークリスマス」が横須賀学院のチャペルにて行われた。ハンドベルやユーオディア・アンサンブルによるコンサートが行われた。

私たちは障がいのある子どもたちを応援しています

第22回インターナショナル・チャリティーラン

障がいのある子どもたちを地域の企業、学校、団体が協力して支援していこうと、「第22回横浜YMCAインターナショナル・チャリティーラン」（後援・神奈川県、横浜市市民局ほか）が、11月16日、横浜市西区のみなとみらい臨港パークにおいて開催されました。県内の企業や学校、ボランティアグループ、日本語学科の留学生をはじめ、各YMCAから103チームが出場し、子どもから高齢者まで515人のランナーと運営ボランティアやランナー家族、応援など1027人が集まりました。

「第22回インターナショナル・チャリティーラン」（主催横浜YMCA、後援神奈川県、横浜市市民局ほか）は、障がい児・者のランナーを含む103チーム515人が出場して開催された。

開会式に先立ちStep in the lifeのダンスと横浜YMCAのチアダンスクラスの子どもたちが演技を披露し会場を盛り上げた。

開会式で実行委員長は、古田和彦大会が「大会を支えてくださる皆さまに感謝いたします。大会を通して互いのきずなを深めあいさつしましょう」とレースは、臨港パークに特設され、最初に昨年から加わった5人全員の仮装やパフォーマンスで思いや願いを表現して走るパフォーマンスコースがスタートした。スタート前には、舞岡地区センターから参加の5人による演奏があり大会を盛り上げた。続いて180メートル（一人につき・以下同じ）のCコース、800メートルのBコース、1100メートルのAコースの4つのコースで行われた。

▲地域の企業や団体、賛助会企業、専門学校学生、各YMCAが参加したAコースのスタート

▲留学生も共に参加

▲皆で楽しく走った

▲たすきに思いをつないで

今年は、マスコットキャラクター（神奈川県・かにゃお、横浜市中区・スウィンギー、横浜市戸塚区・ウナシー）も応援にかけつけた。沿道では約500人を超える人がランナーに声援をおくった。また、横浜YMCA賛助会を中心に地元企業や団体からも多くの参加があった。

レースの結果は、Aコースで「いい国つくろう鎌倉幕府」（鎌倉ワイズメンズクラブ）が18分08秒69で4年連続優勝した。Bコースは「トライアングル特別急行」（日本YMCA同盟）15分45秒48、Cコースは「きょうりゅうとらまん」（YMCAかわさき保育園）3分05秒41となった。

閉会式では、優勝チームに賞状が古田大会実行委員長から手渡されほか、特別賞が15チームに贈られた。このうち出場ランナー5人の年齢の合計が214歳の「最年長賞」や、合計年齢19歳の「最年少賞」、全国協賛の三菱商事株式会社が障がいのある人がスポーツに親しむための支援プロジェクトDREAM AS ONEにちなんで、車椅子で参加した「ふれあいファミリー」（つるみワイズメンズクラブ）にDREAM AS ONE賞として記念のメダルが贈られた。

チームの参加費515万円は、大会実行委員会を代表し横浜YMCA賛助会の西堀隆之さん（協同電気株式会社）から工藤誠一理事長に手渡され、障がいのある子どもたちの支援に用いられる。

大会の運営は、神奈川県安全赤十字奉仕団、各ワイズメンズクラブ、運営委員、専門学校生、留学生など278人のボランティアが担い、ランナーや応援を含め1027名が集った。

※大会の各チームの順位についてはHPをご参照ください。

Topics

誰にでも公平にチャンスのある社会を目指す 中高生向けITプログラミング教室

これからのAI時代における人材育成について昨年11月23日に、アマゾンジャパンが「アマゾン・アカデミー」をホテル雅叙園東京にて開催した。その中で、9月からパイロットプログラムとして行われた「Amazon future engineer」は、さまざまな生活環境を持つ若者に、ITやプログラミングを学ぶ機会を提供しようとライフイズテックと日本YMCA同盟・横浜YMCAが協働し行った。

パイロットプログラムの報告者の一人として、登壇した田口努横浜YMCA総主事は、「発達障がいのある子どもたちや生活保護世帯の中学生、最新のテクノロジーを学ぶ機会が少ない子どもたちに良い機会となりました。参加した中高生たちは目を輝かせて、新しいテクノロジーを駆使して希望を見出すような姿が見られました」と報告した。

パイロットプログラムは、計4回行われ、このうち2回は、湘南とつかYMCAと富士山YMCAグローバル・エコ・ヴィレッジにて昨秋に行われた。

▲「アマゾン・アカデミー」でプログラムの報告をする田口努横浜YMCA総主事（中央）

ポジティブネットをひろげよう
～今月のよくなる一歩～

お友だちのいいところを見つけよう
(Respect　尊敬心)

♪子育てランド♪ 免疫力をあげよう

寒さが厳しくなり、風邪やインフルエンザが流行する季節になりました。ウイルス等の感染予防には、手洗い、うがい、マスクの着用などが大切ですが、ウイルスに対して自分の免疫力を高めることも大切です。

風邪を予防する栄養素は、丈夫な体を作り、病気やけがに対する抵抗力や治癒力を高める働きをするたんぱく質で、主に肉や魚、卵、大豆などに多く含まれます。寒さからのストレスに効くのはビタミンCです。免疫力を高め、回復を早めてくれます。みかんやいちご、キウイ、小松菜、ブロッコリーなどに多く含まれます。のどや鼻の粘膜を正常に保つ、ビタミンAも大切です。粘膜が弱くなると、風邪をひきやすくなります。チーズやレバー、人参、ほうれん草、かぼちゃに多く含まれます。

また、「笑う門には福来る」という言葉の通り、笑いは免疫力を上げる効果があるそうです。

体の芯から温まる食事でしっかり栄養をとり、たくさん笑って元気に冬を乗りきりましょう。

（YMCAとつか保育園
栄養士　岩本由実絵）

横浜 ピンクシャツデー講演会2月に開催

横浜YMCAでは2月に、いじめのない世界を目指そうと今年も「ピンクシャツデー」の運動に全国のYMCAと取り組む。今年は、2月26日（水）がピンクシャツデーのため、ピンク色の小物やシャツなどを身につけYMCAへ行こうと呼びかける。

ピンクシャツデーは、2007年にカナダの学生二人からはじまったいじめ反対運動。ピンクのシャツを着て登校した少年がいじめられ、それを聞いた先輩二人が「明日、ピンク色のシャツを学校で着よう」と呼びかけた。賛同した数百人の生徒がピンクのシャツや小物を身につけて登校し、いじめが自然となくなった。今では70カ国以上でいじめに反対する活動が行われている。

横浜YMCAでは、2月1日(土)午後2時から4時に横浜中央YMCAにおいて「みんなちがってみんないい！」をテーマに、LGBTQの方や、外国につながる方、発達障がいの方など多様な立場からの体験を聞き、いじめや差別について考える講演会を実施する。

再エネ×教育×ＳＤＧｓシンポジウムに250人が参加

「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」の実現を考えた

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

12月2日に衆議院第一議員会館大会議室にて開催された「再エネ×教育×SDGsシンポジウム」"RE Action For Teacher"（主催 みんな電力／東京都）では、教育の分野において再生エネルギー（以下、再エネ）導入の事例を学び、SDGsにおいて教育機関が果たす役割を共に考えた。

シンポジウムは、基調講演、パネルディスカッション、学生による発表があった。基調講演では、江守正多氏（国立環境研究所 地球環境研究センター副センター長）が「気候変動を巡る世界の動向」を「この状態が続くと2040年前後には、1・5度上昇し、2050年前後には3～4度程度上昇する」と危機感を示した。「パリ協定で目指している1・5度未満の上昇に抑えるためには、2050年前後にCO2排出量をゼロにする必要がある」と語った。次に、山藤旅聞氏（新渡戸文化学園教諭）は、「大人の持っている経験や関係性を生かし、子どもたちと一緒に未来を創ろうという姿勢で取り組むことが重要」と語り、同校が推進するプロジェクトを生徒が紹介した。

パネルディスカッションでは、田口努横浜YMCA総主事が4人の教育関係者などと登壇し、山根小雪氏（日経エネルギーNext編集長）のモデレートによりそれぞれの取り組みのきっかけや課題、今後の計画などを語り合った。田口総主事は、YMCAは産業革命からはじまり、人間性の回復と連帯する社会を創造する運動体であり、再エネへの変換を進めていることを報告した。「横浜YMCAから全国のYMCAに再エネの利用を勧め、子どもたちが自ら考えて行動する場をさらに広げていきたい」と語った。

5グループの学生の発表では、横浜YMCA学院専門学校国際情報ビジネス科1年生の二人が、自国のエネルギーや課題を日本語でスピーチした。最初に、レザンリンさん（ベトナム）は、ベトナムの民族衣装アオザイを身に付け「地球環境にやさしい再生エネルギーの利用」をテーマに、「もっと多くの人に再生エネルギーを知って利用してもらいたい」と語った。次に、ラスアヌタヒナ ミラナ ジョシアさん（マダガスカル）は、「マダガスカルとSDGs」をテーマに「日本での再生エネルギーの取り組みがマダガスカルの環境も守ることにつながるので取り組みを進めたい」と語った。参加した約250人が再エネの取り組みを進める必要性を学んだ。

▲シンポジウムに参加した学校や団体、講師のみなさんとともに

▲ラスアヌタヒナ ミラナ ジョシアさん

今年は「ONE WORLD ONE LOVE ONE HEART 平和をつくり出す人は幸いである～和解の務めに生きる～」をテーマに講演会と各事業による平和につながる取り組みの紹介や体験を通して、平和で公正な社会づくりを考えていく。

午前の講演会は、関田寛雄氏（日本基督教団牧師）を迎え、私たちがどのように差別や偏見、敵意を乗り越え「共に生きる」世界をつくり出していくことができるかについて考えていく。午後には、各事業（健康教育・語学・専門学校・高齢者・保育・アフタースクール・オルタナティブの各事業）において子ども向けの平和を感じるアクティビティーやパラスポーツの体験、子どもたちによる広島ピースキャンプの報告などが行われる。また、ワイズメンズクラブやボランティアリーダー、会員事業委員会などからそれぞれの活動紹介などを予定している。

大会には、どなたでも参加できる。参加費無料。予約不要。問い合わせは横浜YMCA会員大会事務局☎045（440）3763へ。

こもれび

一隅を照らす

総主事
田口　努

天に召された。中村医師と亡くなった現地スタッフの家族、関係者の上に神様の癒しと恵みが注がれるよう祈りたい。

中村医師は、中学をミッションスクールで過ごし、キリスト教と出会い受洗され、九州大学YMCAで聖書を学び、卒業後YMCAが源流のJOCS（キリスト教海外医療協力会）の要請でペシャワールに派遣され、医療過疎の山村の診療所やハンセン病患者のために尽力した。その後、アフガニスタンでの診療で、干ばつで亡くなる子どもたちを見た。きれいな水がなければ、薬があってもどうにもならないと砂漠化した土地を農地にしようと「緑の大地計画」を始めた。壮大なかんがい用水路計画に希望を託し現地農民も参加した。

7年後の完成時は、1・5万ヘクタール（東京ドーム3千5百個分）の土地を潤し、60万人の生活が豊かに戻った。現地の青年を専門家に育成し、全土にこの活動を広げる道半ばに命を落とした。隣人に寄り添い一隅を照らしたこの活動が根付くよう水やりを続けてほしいと願う。

自然相手は　ただ根気
何があっても　ただ水やり
褒められても　くさされても
ただ水やり
誰が去っても倒れても
ただ水やり
嬉しくても　疲れていても
ただ水やり
風が吹いても　日照りでも
ただ水やり
邪魔されても　協力されても
ただ水やり
誰が何と言おうとただ水やり
魔法の薬はありません
（詩　故中村哲医師）

アフガニスタンで、困難にある人びとに、隣人として寄り添う医療活動やかんがい用水計画で多くの命を救う平和の礎をつくってきた中村哲医師が12月4日凶弾に倒れ

FLASH NEWS

12月1日の世界エイズデーに合わせて、11月30日に新都市プラザ（横浜駅東口）にて「世界エイズデー in YOKOHAMA」（主催 横浜AIDS市民活動センター/横浜YMCA運営受託）が開催された。正しい知識を身に付け、エイズへの偏見をなくそうと世界各地で啓発のイベントが行われた。参加者はクイズや展示資料を通して理解を深める機会となった。

▲レザンリンさん

かながわの朝鮮学校交流ツアー（略称トブロツアー/主催 かながわの朝鮮学校交流ツアー実行委員会/14の参加団体とともに横浜YMCA/共同代表 田口努横浜YMCA総主事）は、2月15日（土）午前10時から横浜朝鮮初級学校にて行われる。授業参観や元Jリーガーアンヨンハさんの講演、グループトークなどを通して、共に生きることについて考える。参加費500円（資料代/学生無料）、会場にて9時30分から受付。事前申込み不要。

2月11日に会員大会を開催

関田寛雄氏が湘南とつかYMCAで講演

横浜YMCAでは、会員相互の交流と学びの機会として、2月11日（火・休）午前10時から午後2時に湘南とつかYMCAにて第6回目となる会員大会を開催する。

ワイズコーナー　ワイズはYMCAの応援団

横浜ワイズメンズクラブ

ワイズメンズクラブには5つの信条がありますが、その一つに「青少年のためにYMCAに尽くそう」とあります。ワイズはYMCAの活動を信頼し、応援する団体です。

11月には、チャリティーランや、ウエルカムフェスタなどに欠かせない働き手として参加しました。また、互いの信頼関係を深めるために、Y-Y's協議会という定期的な打ち合わせ会を持ち相互理解に努めています。そして、1月にはワイズとYMCA合同新年会を行い、杯を酌み交わし、交わりを深めます。

YMCAに賛同し、支援する最も早道は、ワイズメンズクラブの一員になることです。YMCAを愛し賛同される方、お待ちしています。

（横浜ワイズメンズクラブ会長　古田和彦）

横浜中央YMCA ☎045(662)3721
横浜北YMCA ☎045(433)4321
藤沢YMCA ☎0466(26)1151
横須賀YMCA ☎046(834)5811
川崎YMCA ☎044(932)2031
厚木YMCA ☎046(244)4181
YMCA ACT ☎045(316)1881
鎌倉YMCA ☎0467(24)7859
YMCA山手台センター ☎045(813)1022
湘南とつかYMCA ☎045(864)4768
金沢八景YMCA ☎045(782)3003
YMCA東とつかセンター ☎045(392)3747
大和YMCAライフサポートセンター ☎046(264)3192
横浜YMCAワークサポートセンターアンジュ ☎045(867)0090
横浜YMCAワークサポートセンターレザン ☎045(860)5252
YMCAあつぎ保育園ホサナ ☎046(222)8619
YMCA山手台保育園アルク ☎045(813)1022
YMCAとつか保育園 ☎045(870)3663
YMCAマナ保育園 ☎045(790)3588
YMCAとつか乳児保育園 ☎045(870)3235
YMCAつるみ保育園 ☎045(500)5030
YMCAかわさき保育園 ☎044(520)1825
YMCAいずみ保育園 ☎045(800)3010
YMCA東とつか保育園 ☎045(820)5588
YMCA東かながわ保育園 ☎045(440)3763
YMCAたかつ保育園 ☎044(281)7833
金沢八景YMCA保育園 ☎045(353)5130
YMCAオベリン保育園 ☎042(707)9974
大和YMCA保育園 ☎046(214)3192
富士山YMCAグローバル・エコ・ヴィレッジ ☎0544(54)1151
三浦YMCAグローバル・エコ・ヴィレッジ ☎046(888)2100
鶴見中央YMCA ☎045(508)7800
YMCAライフサポートセンター鶴見 ☎045(506)0131
YMCAライフサポートセンター関内 ☎045(680)6680
本部事務局 ☎045(662)3721

INFOMATION

横浜YMCA

レクチャー

■イングリッシュセミナー
日　時　1月17日（金）午前10時～正午
会　場　鎌倉YMCA　201教室
テーマ　「Filipino Migrant Youth」
講　師　April Moritoさん
参加費　会員1,200円、一般1,500円
申込み　鎌倉YMCA　☎0467(24)7859

■ピンクシャツデー2020　パネルディスカッション「みんなちがって　みんないい！」
日　時　2月1日（土）午後2時～4時
会　場　横浜中央YMCA　9階チャペル
テーマ　「ちがい」と「いじめ」を自分ごとにする
内　容　LGBTQ、外国につながる方、発達障がいの方、によるパネルディスカッションなど
参加費　500円
問合せ　横浜北YMCA　☎045(433)4321

キリスト教理解

■聖書からの学び
日　時　1月30日（木）、2月6日（木）
午前10時30分～11時10分
会　場　湘南とつかYMCA　2階教室
講　師　堀野浩嗣氏（横浜戸塚バプテスト教会牧師）
テーマ　「キリストの福音」
参加費　無料
問合せ　湘南とつかYMCA　☎045(864)4990

■バイブルカフェ
日　時　1月30日（木）
午後1時15分～2時15分
会　場　川崎YMCA21教室
講　師　青木　靖氏（登戸エクレシアキリスト教会副牧師）
テーマ　「人生のチャレンジと聖書」
参加費　無料
問合せ　川崎YMCA　☎044(932)2031

■聖書を読んでみよう会
日　時　1月21日（火）午後6時30分～8時
会　場　横浜中央YMCA 6階教室
テーマ　「ルカによる福音書を読む」
参加費　無料
問合せ　横浜中央YMCA　☎045(641)5492

■聖書に聞く
「新約聖書　イエスのたとえ話その2」
日　時　1月17日（金）午前11時～正午
会　場　横須賀YMCA
テーマ　「ぶどう園と農夫」
参加費　無料
問合せ　横須賀YMCA　☎046(834)5811

イベント

■横浜YMCAつながるCafé
日　時　1月18日（土）午後2時～4時
会　場　横浜中央YMCA 8階ラウンジ
内　容　苔玉を使ったミニ盆栽づくり
参加費　無料（コーヒー、クッキーなど1品100円で販売しています）
問合せ　横浜YMCA学院専門学校
☎045(641)5785

■横浜YMCA会員大会
日　時　2月11日（火・休）
午前10時～午後2時
会　場　湘南とつかYMCA
テーマ　ONE WORLD　ONE LOVE　ONE HEART　「平和をつくる人は幸いである～和解の務めに生きる～」
参加費　無料（申込み不要、出入り自由）
問合せ　会員大会事務局　☎045(440)3763
○子どもから大人まで誰でも参加可能なフェスティバルです。

カルチャー

＜なつかしい童謡や唱歌を歌います＞
■横浜中央YMCA　歌のハーモニー
日　時　1月14日、28日（火）午前10時～正午
対　象　一般、ウエルネス会員
会　場　横浜中央YMCA
参加費　一般1,000円、ウエルネス会員無料
申込み　横浜中央YMCA　☎045(661)0084

■北YMCA　うたごえひろば
日　時　1月14日（火）午後12時40分～2時30分
対　象　一般（熟年世代の皆さん）
会　場　北YMCA 3階スタジオ
参加費　300円
申込み　北YMCA　☎045(433)4321

■湘南とつかYMCA　うたごえひろば
日　時　1月21日（火）午後2時～4時
対　象　一般（熟年世代の皆さん）
会　場　湘南とつかYMCA 1階ホール
参加費　300円
申込み　湘南とつかYMCA　☎045(864)4768

■藤沢YMCA　うたごえひろば
日　時　1月17日（金）
午後1時15分～3時15分
対　象　一般（熟年世代の皆さん）
会　場　藤沢YMCA
参加費　500円
申込み　藤沢YMCA　☎0466(26)1151

■厚木YMCA　うたごえひろば
日　時　1月28日（火）午後2時～3時30分
対　象　一般（熟年世代の皆さん）
会　場　厚木YMCA
参加費　500円
申込み　厚木YMCA　☎046(222)8619

■生麦地域ケアプラザ　うたごえひろば
日　時　1月15日（水）午後1時30分～3時30分
対　象　一般（熟年世代の皆さん）
会　場　生麦地域ケアプラザ（横浜YMCA運営委託）2階多目的ホール
参加費　100円
申込み　生麦地域ケアプラザ
☎045(510)3411

子育て支援

■横浜子育てサポートシステム入会説明会
日　時　1月15日（水）、30日（木）
午前10時30分～11時30分
会　場　中区地域子育て支援拠点のんびりんこ
対　象　横浜子育てサポートシステムに入会を考えている方
問合せ　横浜子育てサポートシステム中区支部事務局　☎045(663)0676

学校説明会

■横浜YMCA学院専門学校作業療法科
日　時　1月11日（土）、25日（土）
午前10時～12時30分
内　容　学校説明会
申込み　☎045(641)5785

■YMCA健康福祉専門学校
日　時　1月11日（土）、25日（土）
午前9時30分～12時30分
内　容　学校説明会・体験授業
申込み　☎046(223)1441

■横浜YMCAスポーツ専門学校
日　時　1月11日（土）午後2時～4時
内　容　入試説明会
申込み　☎045(864)4990

■YMCA国際ビジネス専門学校　観光ビジネス科
日　時　1月11日（土）、25日（土）
午前10時～正午
内　容　オープンキャンパス・体験会
申込み　☎044(932)2015

※各校とも入試が始まっています。詳細は電話、HPにて各校へお問い合わせください。

ボランティア情報

■横浜YMCA会員大会
日　時　2月11日（火・休）
会　場　湘南とつかYMCA
集　合　午前9時
解　散　午後3時予定
内　容　受付や設営など大会運営のお手伝い
申込み　1月31日（金）までに会員大会事務局石川まで。☎045(440)3763
○可能な時間帯でのお手伝いをお願いします。

My Y Story 120

学生YMCAで種蒔かれ 私が、私を取り戻した

横浜YMCA常議員
横浜中央YMCA運営委員
黄　崇子（シッォンツウ）

「私、黄崇子は父が台湾人、母は日本人の在日台湾人二世です」と出自を明かし名乗るようになったのは1980年。日本YMCA同盟学生YMCA（以下学Y）夏期ゼミへの参加がきっかけです。当時「江夏崇子」として通学した青山学院大学に関田寛雄先生が顧問の学Yがあり、級友に誘われ東山荘へ行くと「差異を差異としてつきつめる」をテーマに議論し聖書研究をする学生たちがいました。「黄崇子」として生まれながら教員採用試験国籍条項等に将来の不安を感じて「帰化」した私にとって、そこは他者を他者として認める、本当の自分を取り戻せる場でした。

翌年の学生基督者運動現場研修（SCM生野・釜ヶ崎）で差別の社会構造を学ぶ中、「私が国籍や名前を変えるのではなく日本社会がかわらなくてはならないのでは」と考えるようになりました。その後、世界学生基督者連盟（WSCF）のプログラムに参加。台湾留学を勧められ、中原真澄・望月浩学生部主事を中心とする会に支えられ戒厳令下の台湾へ。

1983年当時の台湾は、集会も結社も言論の自由もなく、独立を語れば死刑という国でした。

受け入れの台湾長老教会はこれに抵抗し総幹事まで拘束されるという民主化運動の渦中でした。私はテロ現場の教会で政治犯家族の日本語クラスを担当し、強制出国、ブラックリスト入りとなりました。抑圧された民衆が歴史に参与するさまはイエスはこういう所にこそおられると私に確信させました。すべて学Yの「種蒔き」からはじまったことでした。

1998年慶応大学Y武田利邦さんに続き、横浜中央YMCA運営委員。常議員として九州大学Yの中村哲さんを創立120周年講演にお招きしました。昨年の訃報は大変悲しく、中村さんが言葉と行動で憲法9条を体現されたことを記憶に留めたいと思います。日本YMCA同盟では常議員として「台湾元慰安婦」の声を届けました。

今、再生エネルギーの電力利用を進める横浜YMCAと「コンセントの向こう側を想像」し応答したいと思います。「よくなっていく。」は続きます。YMCAは応答責任を果たしたい人の群れなのかもしれません。

▲WSCFのHRD（ヒューマンリソースデベロプメント）でアジア各国の代表と討議や交流深めた（1982年/タイ・バンコクにて／2列目右から8人目）

▶デスクペン　YMCA創立136年の年を迎えました。皆さまのお支えに感謝いたします。今年もYMCAで新しい出会いとつながり、自分がよくなっていくことを感じられる体験が豊かにありますように。皆が気持ちを合わせて平和を創る輪がひろがりますように。（直）